



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2023年10月
第127号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 宮 澤 義 文



目 次

漢点字の散歩（63）（岡田健嗣）	1
字式について（1）（岡田健嗣）	8
点字から識字までの距離（120）（山内 薫）	10
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（宮澤義文）	23

漢点字の散歩 (六十三)

岡田 健嗣



カナ文字は仮名文字 (14)

これまで靴の上から霜焼けを搔くような手つきで「万葉集」の表記を考えて来ました。と申すのも私は、この日本に視覚障害者として生を受けて、その結果として二十九歳に至るまで、わが国の表記法である「漢字仮名交じり」法から阻害を受けて来ました。それによって、残念ながらわが国の文学の伝統である和歌や物語に、またわが国の文化に大きな影響を与えてきた中国の文学や思想に触れることができませんでした。そういう状況を打開してくれたのが、私が漢点字を習得したことと、漢点字訳のボランティア活動である本会の活動を始めたことでした。本会は一九九六年に発足しましたが、漢点字訳書を作るという目的を掲

げた活動をしている人も団体もありませんでしたので、私自身手探りの状態で活動を始めたのでした。

そして二〇二一年には、その成果である『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社）の漢点字訳を完成しました。このことは私にとって、初めて古典への手がかりを得たものでした。この稿を起こそうと思いつたのも、「万葉集」を私なりに読んでみようと思ひ、少々乱暴ではありますが、試みることにしたのでした。

「万葉集」は、そこに収められた歌々の作者のお名前を年代順に見て参りますと、仁徳天皇の時代である四世紀前半から七五九年までの、約三五〇年の間に作られた御歌ということが出来ます。仁徳天皇の皇后である磐姫皇后（いはのひめのおほきさき）、雄略天皇、聖徳太子の作られたとされる御歌を初め、舒明天皇や悲劇の皇子と言われる有間皇子の御歌、その他にも古い時代の方々のお作りになられたとされる御歌が収められております。

しかしながらそれらの御歌の形式や表記を具に見ておりますと、果たしてこの御歌が磐姫皇后作の御歌で

あろうか、あるいは雄略天皇が手づからの御歌であろうかという疑問が沸々と湧いて参ります。磐姫皇后の御歌は、如何にも韻律の整った、短歌の形式に則った万葉歌と呼ぶにふさわしい御歌です。また、雄略天皇の御歌は、宮中の儀礼で、声に出して唱えられるにふさわしい求婚歌で、その後で紹介される万葉集の長歌や短歌の形式とは、一線を画した形式を呈しています。この雄略天皇の御歌、それに続く舒明天皇の御歌は、その後の長歌・短歌・旋頭歌などとは異なる形式の御歌と申してよい御歌だということができるように見えます。

そのことを角度を変えて申せば、「万葉集」の第三番の御歌以後の御歌は、共通する形式、共通する韻律、共通する文字遣いの元に作られた御歌だということができるのだということが言えるのかもしれないと、私は思っております。

また、「万葉集」を表記するのに用いられている文字は〈漢字〉であることを、私たちは忘れてはならない

と思います。「万葉歌」を「和歌」と捉えますと、どうしても私たちが慣れ親しんでいる漢字仮名交じりの表記の歌を思い浮かべます。しかし「万葉集」の歌は、本来漢字だけで表された歌で、それをどのように読むかが、大きな問題であったという過去があります。私たちは既にそれを読み慣わされた読み方で読んでおりますが、ある意味でそれは、「万葉集」の本来の読みではないのかもしれない、という含みを、「万葉集」に向かうときは、心得ておくことが必要なのかもしれない。

また、私たち現代の日本人が〈漢字〉を思うとき、その読みには「音読」と「訓読」があると、当然のように考えます。しかしこれをよく考えてみますと、もともと〈漢字〉の読みは、中国の音だけだったので、「音読」とか「訓読」とかの区別はありません。「音読」や「訓読」という読みは、飽くまで日本だけの読みだということを銘記しておかなければなりません。そしてこの「万葉集」では、〈漢字〉を「音読」し、また「訓読」して歌にしております。まだ仮名文

字が現れる前に、「訓読」が、十分に成立していたと考えなければならぬのですが、このことは、誠に大きな謎と思われてなりません。

そこで誠に拙い試みではありますが、「万葉集」に使用されている文字の読みを、一つ一つ現在の読みとして、取り出してみようと思います。

「万葉集」でも、最も古い作と考えられている、柿本人麻呂の略体歌を取り上げてみたいと思います。

一二四七

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

(一文字づつ、音読と訓読を書き出します。)

「大」ダイ・おおきい 「穴」ケツ・あな 「道」

ドウ・みち 「少」ショウ・すくない・すこし

「御」ゴ・おん・み 「神」シン・かみ 「作」サク

・つくる 「妹」マイ・いもうと 「勢」セイ・いき

おい 「能」ノウ・よい・あたらう 「山」サン・やま

「見」ケン・みる 「吉」キチ・よい

大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らくし
よしも

「大穴道」、「おほなむち」は大国主命、ここでは現代の訓読で「おお・あな・みち」の文字が当てられています。記・紀では「大己貴」と表記されますが、「大穴道」、読み下しでは「大汝」と表記されています。「少御神」、「すくなみかみ」は現代の訓読も同様です。「作」、「つくらしし」、訓読の「つくる」で、送り仮名と助詞が省略されています。「妹勢能山」、「いも」は訓読、「セ」は音読、「ノ」は音読、「やま」は訓読、読み下しでは、「勢」ではなく、「背」が使用されています。そして助詞「の」に、「能」が当てられています。そして助詞の「を」が省略されています。「見吉」、「みらくしよしも」、「見」の訓読「み」、「吉」の訓読「よし」、送り仮名「らくし」と助詞「も」が省略されています。

* ここでは助詞は「妹勢能山(いもせのやま)」の「能」だけが使用されていて、他は全て省略されて

います。また、「大穴道」と「少御神」、そして「妹勢能山」は固有名詞で、訓仮名と音仮名で表記されていますが、強く漢字の意味に引かれていますし、その意味でも訓読から訓仮名への移行期を思わせます。

一二四八

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与

「吾」ゴ・われ 「妹」マイ・いもうと 「子」シ
・こ 「見」ケン・みる 「偲」シ・サイ・しのぶ
「奥」オウ・おく 「藻」ソウ・も 「花」カ・はな
「開」カイ・あく・ひらく 「在」ザイ・ある
「我」ガ・われ 「告」コク・つげる・のる 「与」
ヨ・あたえる

我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたらば
我れに告げこそ

「吾妹子」、「わぎもこ」は、愛しい女性を呼ぶ語です。都に残して来た妻を指すものか、助詞の「と」

は省略されています。「見偲」、「みつつしのはむ」、(沖の藻の花の咲くのを)見ながら偲ぼう、「見」と「偲」の二字で表されていて、送り仮名が省略されています。「奥藻」、「おきつもの」は沖の藻、「花開在」、「はなさきたらば」は、花が咲いたら、「我告与」、「われにつげこそ」、私に教えて欲しい、送り仮名・助詞が省略されています。「与」を「こそ」と、恐らく助動詞と読ませています。

* 一人称の代名詞で「われ」と訓読する文字として、「吾」と「我」の二つの文字が使用されています。現代語でもこの二文字の使用され方は異なっていますが、古い時代でも、現代とは違った意味で、異なった使用のされ方をされると言われます。読み下し分では、どちらも「我」が用いられています。また、「奥」の字が「沖」の意味で使用されています。

一二四九

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉

「君」クン・きみ 「為」イ・ため・なす 「浮」フ・うく 「沼」シヨウ・ぬま 「池」チ・いけ 「菱」リヨウ・ひし 「採」サイ・とる 「我」ガ・われ 「染」セン・そめる 「袖」シユウ・そで 「沾」セン・うるおう 「在」ザイ・ある 「哉」サイ・かな・や

君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし袖
濡れにけるかも

「君為」、「きみがため」、女性の立場のうたです。あなたのために、助詞「が」が省略されています。「浮沼池」、「うきぬのいけの」、菱の池の名称です。助詞「の」が省略されています。「菱採」、「ひしつむと」、菱の実を摘もうとして、読み下しでは「採」ではなく「摘」が使用されています。送り仮名・助詞が省略されています。「我染袖」、「わがそめしそで」、私が染めた着物の袖が、送り仮名・助詞が省略されています。「沾在哉」、「ぬれにけるかも」、ぬれてしまった、読み下しでは、「沾」ではな

く「濡」が使用されていて、「在哉」を「けるかも」と助動詞として読んでいます。

一二五〇

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮

「妹」マイ・いもうと 「為」イ・ため・なす 「菅」カン・すが・すげ 「實」ジツ・み 「採」サイ・とる 「行」コウ・ギョウ・ゆく・おこなう 「吾」ゴ・われ 「山」サン・やま 「路」ロ・みち ・じ 「惑」ワク・まどう 「此」シ・これ・この 「日」ジツ・ニチ・ひ 「暮」ボ・くれる・くらす
妹がため 菅の実摘みに 行きし我れ 山道に惑ひ
この日暮しつ

「妹為」、「いもがため」、愛する女性(妻)のために、助詞が省略されています。「菅實採」、「すがのみつみに」、菅の実を摘もうと、読み下しでは「採」ではなく、「摘」が使用されています。また、

送り仮名と助詞が省略されています。「行吾」、「ゆきしわれ」、送り仮名と助詞が省略されています。「山路惑」、「やまぢにまとひ」、読み下しでは、「路」ではなく「道」が使用されていて、送り仮名が省略されています。「此日暮」、「このひくらしつ」、道に迷って夜通し山の中を彷徨った。送り仮名が省略されています。

* 一二四九番と一二五〇番の歌は、前者は女性か男性のために菱の実を摘もうとし、後者は男性が女性のために昔の実を摘もうとする、前者は池で、後者は山で、というように、歌と歌とが対応した配置になっています。前者の女性が後者の妻、後者の男性が前者の夫であるという可能性は極めて低いと考えられますが、歌の配置は、相互に互いを思いやっているという形状をなしています。

以上の歌は「人麻呂歌集」から取られたとされる、柿本人麻呂の作である可能性が高いと考えられる歌です。あるいは人麻呂が集めた歌を、人麻呂が書き写し

て保管していた歌とも考えられていますが、その歌に人麻呂が補筆して、新たな形の歌としたとも考えられています。何れにせよ、柿本人麻呂の初期の作品と考えてよいと考えられます。

私の拙い試みとして、歌の漢字に音読・訓読の読みを当ててみました。このような試みはさほど珍しくないのでかと思っておりましたし、多分その通りなのでしょうが、私にとってその結果は、極めて意外なものでした。

私の予想では、これまで読んで来た万葉集の歌々には、現在の訓読とはかなり相違した読みが与えられていたように感じていましたので、ここに取り上げた四首の歌も、同様にかなり異なった訓読がなされているものと思っておりました。もともと、そのように思っておりましたのも、それらの歌の読み、読み下しも含めて、非常に苦勞させられたという経験が関与しているのかもしれないし、またここに取り上げた四首の歌に用いられている漢字が、偶々現在の訓読と同様に読まれているということなのかもしれません。とは申ししても、わが国の文字の表記の初期の「万葉集」

に用いられている漢字の読みが、千数百年を経た後の現代の文字と、同じように読むことができるということは、驚きを持って見られるべきと思われるなりませ

ん。
しかしここに、「面白いことに気づかされました。固有名である「大穴道」は「おほあなむち」↓「おほなむち」、「少御神」は「すくなみかみ」、「妹勢能山」は「いもせのやま」、「浮沼池」は「うきぬのいけ」、そして固有名ではありませんが、「吾妹子」は「わぎもこ」と、訓仮名（勢と能は音仮名ですが）が当てられていて、一つの韻律をなしているように思われることです。この韻律は、これよりもずっと以前の日本語と、現代の日本語とを結ぶ架け橋になるもののように思われます。そしてこの固有名に訓仮名が当てられていることで、訓仮名が訓読の成立なしには叶わないものとしてみれば、訓読と訓仮名がフィードバックすることで、万葉の世が明けることになったのではないか、何かそういう筋道を描けるように思われて来るのでした。

何れにせよはつきりしていることは、わが国の文

字表記の最初期に位置するこの「万葉集」は、既に音読・訓読ばかりでなく、係り結びや枕詞など、極めて高度な言語表現によつて形作られております。言い換えれば、わが国の先人は、まだ文字表記を実現する以前に、このような高度なポテンシャルを手にしていたのだと言ふことができます。

何も文献のないころに、いきなり「万葉集」のような高度な文学作品群が生まれるなどということが、実際に起こりました。実際それ以前には、文献と言え文献は残っておりません。「万葉集」の記事から言えることは、「人麻呂歌集」のようなものは、作られていたらしいことは知られます。人麻呂の作った歌、人麻呂が集めた歌が収められていた集があったと考えられています。これらは「万葉集」の大きな柱として、その要所所に収められていると言われます。また、『書紀』には、それ以前の文書の所在が記されているようですが、残念ながら残っておりません。

以上、『萬葉集』の世界を視覚障害者にも知っていただくため、言語生活の厚みを養っていただきたいと願って止みません。



参考資料

字式について (一)

岡田 健嗣

漢点字の創案者である川上泰一先生は、漢点字は点字であるから、点の組み合わせで漢字の形を表さなければいけない。しかし点字は、点の位置や数に制限があるので、点字で漢字の形を表すことはできないの意味と数を広げて来た。漢字はその意味で、形も大きな要素であって、その理解は重要である。そこで、漢字の形を視覚障害者にも分かるように表す方法を考案した。それが「字式」である、とおっしゃって、文字の構成要素（部首や画）の位置を表すのに、数式の符号を使って表す方法を提示されました。これを「字式」と呼びます。

とは言いましても、川上先生の考案された「字式」とは、極めて基本的な方法で、左右の関係を「+」で、上下の関係を「/」で表すものでした。

例： 村 木偏+寸 守 ウ冠/寸

本会では文字に関する書籍の漢点字訳を試みて参りましたので、文字の形を表すことが求められました。そこでこの川上先生の「字式」を大幅に拡張して、漢字の構成要素（部首や画）の位置関係を「+」と「/」だけでなく、その符号を増やして使用しました。以下にご紹介します。

①+ 「+」は、部首が横に並んだ場合の、左右の関係を表します。

例： 村 木偏+寸 詞 言偏+司 信 人偏+言

②/ 「/」は、部首が縦に並んだ場合の、上下の関係を表します。

例： 守 ウ冠/寸 答 竹冠/合 奇 大/可

③\ 「\」は、漢字のパーツとパーツを重ねることを表します。

例： 十 一\ | 中 口\ | 申 日\ |
春 三\人/日



- ④・ 「・」は、パーツが縦に並んでいるとき、くっついている関係を表します。くっついているのが横線であれば、一本の横線になります。

例： 正 一・止 亜 一・“口\//”・一 奇 立・可

* “ ” は括弧です。

- ⑤> 「>」は、左側の構えの中に右側の部首を入れるか、あるいは左側の部首の右下に右側の部首を入れるかを表します。

例： 国 口構え>玉 間 門構え>日 街 行構え>圭
庄 厂>土 店 广>占

- ⑥< 「<」は、左側の部首を、右側の部首の左下に入れることを表します。

例： 気 メ<气構え 式 工<弋 司 “一/口”<上かど

- ⑦÷ 「÷」は、文字を上下に分けて、その間に部首を入れることを表します。

例： 哀 衣÷口 褒 衣÷保 裏 衣÷里

- ⑧@+ 「@+」は、伸ばした脚の上に部首を載せることを表します。

例： 道 しんによう@+首 冠 ワ冠/“元@+寸”
魅 鬼@+未

- ⑨- 「-（ハイフン）」は、左右の部首や画をくっつけることを表します。

例： 戊 垂れ-戈 識 言偏+音-戈

以上の九つの符号を使って、部首や画の配置を示しています。

次号から、字形をどのように表しているかを、具体例を挙げてご説明します。

点字から識字までの距離（二二〇）

山内 薫

読むことに障害のある子どもへの

読み聞かせ・本の紹介十三の方法（二）

さて、『特別支援学校での読み聞かせー都立多摩図書館の実践から』の「特別支援学校での読み聞かせ六つの方法」に倣って、私の経験からどんな方法が考えられるかを検討してみた。前回ご紹介した静岡県内の特別支援学校へのアンケートも参考にしながら考えたのが以下の一三の方法である。都立多摩図書館の最初の六つの方法はそのまま残し、新たに七つを付け加えた。また該当する具体的な絵本を何冊か挙げた。

一、寄り添って読む

重度の方には、絵本の文章どおりに読むのではなく、その方の気持ちに寄り添って語りかける。お寿司の絵本であれば、「おいしそうだね」「どのお寿司が好き」、動物の絵本であれば「犬は好き?」「もうじ

き子犬が産まれるね」など、一対一で語りかけながら読んでいく。

・ 『どんなおべんとう?』（絵 いわきあやこ、文 麦田 あつこ、小学館 二〇二二）

・ 『おすしやさんにいらっしやい！生きものが食べものになるまで』（文…おかだだいすけ、写真…遠藤宏、岩崎書店 二〇二二）

・ 『こいぬがうまれるよ』ジョアンナ・コール文、ジェローム・ウエクスラー写真、つばいいくみ訳 福音館書店 一九八二）

・ 『パンダ』（岩合光昭写真 新潮社 二〇〇七）

・ 『ごはん』（平野恵理子作 福音館書店 二〇一

五）

二、一部分を読む

本の初めから終わりまで、全部読まなくてもよい。聞き手の興味を持つ部分だけを読むことから始める。

たとえば、電車の絵本であれば、一番好きな新幹線の場面だけを、仕事の絵本であれば、大きくなったらなりたい職業、例えば花屋さんの場面だけをじっくりと楽しむ。興味が広がるにつれ、楽しめるページが増え

ていくだろう。この手法は、図鑑や知識の本で特に効果がある。

・『めくって学べるしごと図鑑』（学研プラス 二〇二〇）

・『ただいまお仕事中』（おちよしこ文 秋山とも子絵 福音館書店 一九九九）

・『のぞいてみよう！厨房図鑑』（科学編集室編 学研プラス 二〇二二）

・『大きな運

転席図鑑 きよ

うからぼくは運

転手』（元浦年

康写真、学研プ

ラス 二〇一〇）

三、ダイジェストで読む

文章どおりに読まれると、理解できなかつたり、最後まで聞くことが難しい場合には、ストーリーをかいつまんで話したり、言葉をやさしく言いかえたりして読む。ストーリーの本筋に沿って、本の持ち味を損な



大きな運転席図鑑

わないように伝えたい。読み手は、どのように読むか事前にリライトなど原稿化して準備しておく。また、読んでいるときの聞き手の様子にに応じて原稿をカットしたり、わかりやすい言葉で二度読みするなど臨機応変に対応するとよい。

例えば『注文の多い料理店（名作文学紙芝居）』

（宮沢賢治原作 諸橋精光脚本・絵 鈴木出版 二〇一九）の場合、そのまま読むと一五分ほどかかるが、作中の扉に書かれた文字を中心に他の部分はかなり省略して読み進めると五分以下で読むことができる。

四、読んだことを体験する

実物を添えたり、読んだことを体験してみると、本への興味が深まる。ドングリの絵本なら、実物のドングリで子どもの興味をひいてから視線を本の方へ誘ってみる。実際にドングリ拾いをしてみるのもよいだろう。

『干したから』（森枝卓士 写真・文 フレーベル館 二〇一六）は様々な乾燥食品を紹介した写真絵本だが、ダイコンと切り干しダイコンなど、元の食品と乾燥食品の実物を見てもらったり、かつお節は元はど

んな生き物だったか、など現物を見て想像してもらえ
ると良いだろう。さらに同じ作者の『食べもの記』

（森枝卓士 福音館書店 二〇〇一）には、乾燥食品
だけでなく世界の様々な保存食も写真で紹介されてい
るので、興味を持った子どもには併せて紹介するとよ
い。

・『びっくりまっぼっくり』 多田多恵子作 堀川
理万子絵 福音館書店 二〇一〇

・『どんぐりころころ』 片野隆司写真 ひさかた
チャイルド 二〇〇七

・『くだものなんだ』 きうちかつ作絵 福音館書
店 二〇〇七

五、クイズをしながら読む

読む前などにクイズを入れて、聞き手と応答してか
ら読むと集中してもらえらる。クイズが好きな子ども
も多く、クイズ形式の絵本は人気がある。例えば「十二
支の絵本」を読む前にみんなの干支を聞いたり、来年
の干支を答えてもらってから読むことも導入になる。

・『どっとこどうぶつえん』（中村至男作 福音館
書店 二〇一四年）では、ドットで描かれた様々な動

物を当ててもらおう。

・『いるいるだあれ』（岩合日出子文 岩合光昭写
真 福音館書店 二〇〇七年）は動物のシルエットか
ら動物名を当ててもらおう。

・『やさいのおなか』（きうちかつ さく・え 福
音館書店 一九九七年）は野菜の断面から野菜の名前
を当ててもらおう。

・『まどのむこうのくだものなあに？』（荒井真紀
さく 福音館書店 二〇一九）

・『おめんです』（いしかわこうじ 偕成社 二〇
一三）

・『LOOK AGAIN!』（TANA HOB
AN MACMILLAN 一九七二）

六、繰り返し読む

機会があれば同じ本を繰り返し読むと、その時に応
じていろいろな楽しみ方をしてもらえる。小さい頃楽
しんだ絵本を大きくなってから、また読むのも実りが
あるだろう。

・『おおきなかぶ』（A・トルストイ 再話、内田
莉莎子訳、佐藤忠良画 福音館書店 一九六六）の

なかで繰り返される「うんとこしょ どっこいしょ」
などのように絵本の中にくり返し現れる言葉を一緒に
唱和してもらうことで、本読みに参加してもらうこと
もできる。

・『三びきのやぎのがらがらどん』（マーシャ・ブ
ラウンエ せたていじやく 福音館書店 一九七九）

・『かばくん』（岸田衿子さく 中谷千代子え 福
音館書店 一九六六）

・『だるまさんが』『だるまさんの』『だるまさん
と』（かがくいひろし ブロンズ社 二〇〇八）

七、ことばを楽しむ

子どもは、リズムカルで楽しい音やことばに反応す
る。リズムカルなことばに体をゆすったり、声をあげ
たりすることもある。

「もこもこもこ」という人がたまにいるが、正しく
は「もこもこもこ」と一つ目と二つ目のもこの間は
一拍空けるのが正しく「もこもこもこ」は誤読といっ
てもいい。『ころころころ』を歌にした経験があつて
反応は良かったが、「もこもこもこ」は歌にはでき
ない。

三宮麻由子の絵本『おいしいおと』や『でんしゃは
うたう』に出てくる音は読みの脚本といつても良い。

「どだどとおーん どだどととーん どだどととーん
たたっ つつつ つつ つつ つつ つつ つつ つつ
たたっ つつ つつ つつ つつ つつ つつ つつ

たたた つつ つつ つつ つつ つつ つつ つつ どど
ん」をどんな風を読むか読み手の表現力や想像力が問
われる。また聞き手と一緒に唱和して楽しむの良い
だろう。

・『ころころころ』（元永定正さく 福音館書店
一九八四）

・『もこもこもこ』（たにかわしゅんたろう さ

くもとながさだまさ え 文研出版 一九七七）

・『おいしいおと』（三宮麻由子ぶん ふくしまあ
きえ え 福音館書店 二〇〇八）

・『でんしゃはうたう』（三宮麻由子ぶん みねお
みつ え 福音館書店 二〇〇四）

・『カニ ツンツン』（金関寿夫ぶん 元永定正え
福音館書店 二〇〇一）

・『コツケモーモー！』（ジュリエッド・ダラスⅡ
コンテ文 アリソン・パートレット絵 たなかあきこ

訳 徳間書店 二〇〇一)
八、紙芝居を有効活用する

紙芝居は舞台があることで絵本などとは違った臨場感があり、注意を引きやすい。紙芝居を演じるときには読み手の顔を隠さずにみんなに見えるようにして読む。ただし『「紙芝居」の舞台は、演者と子どもたちの間にどうしても距離感が生じる、それを嫌がる子どもたちもいて、舞台は子どもたちの様子次第で使っています。』(『お

おにぎりおにぎり

The image shows a musical score for the song 'Onigiri Onigiri'. It consists of two staves. The top staff is for the Kitarow (guitar) and the bottom staff is for the Organ. The lyrics are written below the notes. The Kitarow part has lyrics: 'おにぎりぎゅっぎゅっ おにぎりぎゅっ うめばしいれて めゅっ めゅっ'. The Organ part has lyrics: 'おにぎりぎゅっぎゅっ おにぎり のりをまいて できあがり'.

はなし会がはじまるよー特別支援学校(肢体不自由校)での図書館活動』おはなしの会うさぎ編集発行 二〇一七)という指摘もある。

・『おおきくおおきくおおきなあれ』(まついのりこ作・絵 童心社 一九八三)

・『ぞうさんきかんしゃぽっぽっ』(とよたかずひこ 童心社 二〇一七)

・『いもむしころころ』(長野ヒデ子脚本・絵 童心社 二〇一七)

・『おにぎりおにぎり』(長野ヒデ子脚本・絵 童心社 二〇〇八)

九、歌や音楽を取り入れる(「おおきなかぶ」「ぐりとぐら」の楽譜参照)

絵本や紙芝居などを読む場合、歌や音楽を入れるとしても効果的である。歌などが出てくる作品は勿論、どんな絵本でも、言葉にちよつとした節をつけるなど音楽に乗せることで、聞き手を引き込むことができる。また、絵本を読む前に関連した歌を歌うなど効果がある。替え歌の絵本『ねばらねばらなつとう』(林木林作 たかおゆうこ絵 ひかりのくに 二〇一



おおきなかぶのうた

kitarow

Piano

あ まい あ まい かぶになれ

Pf.

おお きなおお きな かぶになれ あ まい あ まい

Pf.

かぶになれ おお きなおお きな かぶになれ

九)は「静かな湖畔」の替え歌絵本で、カッコーとい
う部分をナットーに変えるのだが、皆さんに「ナット
ー、ナットー、ナットナットナットー」と唱和しても

らいながら進め
ていくと盛り上
がる。

・『ぐりとぐら
ら』(中川李枝
子文 大村百合
子絵 福音館書
店)の中には何
回か歌が出てく
るが、自分なり
に工夫して歌に
するとよい。な
お『ぼくらのな
まえはぐりとぐ
ら』絵本「ぐり
とぐら」のすべ
て』(福音館書

店母の友編集部編 福音館書店 二〇〇一)には読者
が作ったこの歌の一一六の楽譜が採録されている)

・『おおきなかぶ』(A・トルストイ 再話、内田

ぐりとぐら

kitarow

Piano

ほくらあなまえは

Pf.

ぐりとぐら このよでいちばんすきなのは おりよりするこ

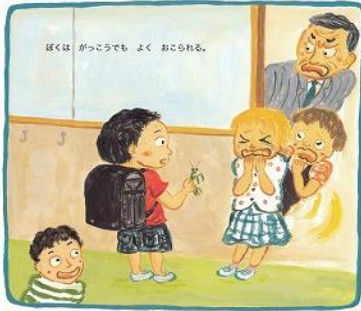
Pf.

たべること ぐりとぐらぐりとぐら ぐりとぐら

莉莎子 訳、佐藤忠良画 福音館書店 一九六六)の
初めの部分「あまいあまい かぶになれ おおきなお
おきな かぶになれ」というお爺さんのはじめの言葉
を歌にするとお話しへの導入となる。

一〇、絵だけのページに文章を加える

絵本の中にはストーリーの展開を絵だけで表現して
いるものもある。ぱっと絵を見ただけでは理解が難し
いような場合には、文章起こしして言葉を補って読む
工夫をしてみたい。ここでは横浜市立盲特別支援学校
の課題図書になった『おこだでませんように』（くす
のきしげのり・作、石井聖岳・絵 小学館 二〇〇
八）の例。八ページで
は「ぼくはがっこうで
もよくおこられる。」
という文章にカマキリ
を女の子に見せている
場面がある。この画面
にさらに下記のような
文章を起こして加えて



おこだでませんように

いる。「ぼくはがっこうにいくとちゅう／おつきいカ
マキリをとった。／ともちゃんよろこぶとおもうたん
や。／ともちゃんにあげようとしたら／ともちゃんな
いてしまった。／／せんせいにまたおこられた。」。ま
た次の九ページも給食当

番の白い服とほっかむり
とマスクを付けた僕が給
食の器に山盛りのスパゲ
ティーをついでしまい、
慌てて先生が止めようと
している絵だけが描かれ
ている。そこには「きゅ



おこだでませんように

うしよくとうばんのとき スパゲティーを やまもり
ついでしまつて またせんせいにおこられた」と文章
を加えると、給食の時の様子で一人分のお皿に必要以
上にスパゲティーをついでしまった場面ということが
分かりやすいだろう。

一一、ゆっくり読む

絵本などを読む場合、普通よりもゆっくりと時間を
かけて読むとよい。聞き手表情などを見ながら、楽し

んで下さっているかどうかを確認しながら読む。また文章にある一つ一つの言葉を丁寧に話し、キーとなる言葉はゆっくり際立たせて読むと、聞き手の理解が増す。

『おおきなかぶ』や『三びきのやぎのらがらどん』のようにストーリー・テリングを元に展開していく絵本もあるが、絵本は「絵」本であり、本来ページーページの絵をゆっくり見て楽しむものである。ともすると文字を読むことが主になりがちだが、時間をかけて絵を楽しんでもらう工夫も必要だろう。

一、二、絵と文章の関係をよく見極める

『どろんこハリー』（ジン・ジオン文 マーガレット・ブレイ・グレアム絵 わたなべしげお訳 福音館書店 一九六四）の本文は五ページ目に印刷されているが、「ハリーは、くろいぶちのある しろいいぬです」は表紙を見せながら左側の犬を指さして読み、次の「なんでも すきだけど、おふろにはいることだけは、だいきらいでした。」と標題紙のページを見せながら読む。さつとページをめくって、次の見開きページで「あるひ、おふろに おゆをいれるおとが き

こえてくると、ぶらしをくわえて にげだして」と言い、本文のある五ページの階段を駆け下りるハリーを見せて、次のページをめくり「うらにわに うめました」と読むと絵と文章のつじつまが合う。この本は絵をゆっくり丹念に時間をかけてみてもらう。（『心に緑の種をまくー絵本の楽しみ』 渡辺茂男著 新潮社 一九九七 一八六―一九〇ページ参照）

『ロバのシルベスターとまほうのこいし』（ウイリアム・スタイグ作 せたていじ訳 評論社 二〇〇六）のシルベスターが石からロバに戻る場面の文章は「ほんとのぼくにもどりたい！」と願うところまで、前のページで読んだ方がよい。

『ぐりとぐら』（おおむらゆりこ え なかがわりえこ 文 福音館書店 一九六七）の二三ページの二行目までは前のページを見せて読む。

『はちうえはぼくにまかせて』（マーガレット・ブレイ・グレアム文 ジン・ジオン絵 もりひさしやく ペンギン社 一九八一）の冒頭に「ある日、トミーはおかあさんに言いました。」と補つても良い。（『よみきかせのきほんー保育園・幼稚園・学校

での実践ガイド』 東京こども図書館 二〇一八 参照。またこの冊子の巻末のキーワードから絵本を探するための件名索引も参考になる)

一三、むずかしい言葉をやさしい言葉になおす

絵本や物語の中にむずかしい表現や分かりにくい言葉が出てくることがある。前出の『どろんこハリー』二七ページには「にかいへむかって いちもくさん」という文章が出てくるが、場合によっては、その部分を「にかいにむかって おおいそぎ」と言い換えるといい。また、一六ページの「もつといっぱいあそびたかったけど、うちのひとたちに、ほんとうにいえてたとおもわれたらたいへんです」という部分では、そのページに描かれていない「うちのひとたち」の考えが間接話法で表現されています。このような場合主語を補い「ハリーは、もつと遊びたいと思ったけれど、家に帰ることにしました。」と、思い切って単純化する。(『特別支援学校での読み聞かせ』より)

また、ろう学校での例として次のようなレポートもある。「『にわかには水かさが増す』という文を読んでも、『庭／蟹／水／傘／増える』という手話で表し、

『蟹がなぜ出てくるの?』と尋ねると『蟹は水が好きだから』などと答えた例のように、間違って解釈する例が多いので、『にわかには』の下に『急に』、『水かさ』の下に『水の量』などと補足説明がある図書も必要だろう。(脇中起余子「聴覚障害特別支援学校(ろう学校)と学校図書館」、野口武悟編著『一人ひとりの読書を支える学校図書館―特別支援教育から見えてくるニーズとサポート』読書工房 二〇一〇)」「

このような場合には「きゆうに水の量がふえて」とやさしい言葉に替えると分かりやすいだろう。

以上はろう特別支援学校での実践の中から得られた方法だが、重度の障害児の場合にも応用できるだろう。ただし、本来の読み聞かせは、あくまでも原本の表現を尊重して行うことが望ましいことはいまでもない。従って「いちもくさん」という表現を残して「にかいにむかって いちもくさん おおいそぎ」と重ねて言葉を補ってもよいだろう。

また「五羽の子ガラス」というような場合も「カラスの子どもが五羽」というように言い換えるだけで分かりやすくなる。

欲ばりの泉

貪泉 たんせん 吳隱之 ごいんし

古 コ 人 ニン 云 ヘラク 此 コノ 水 ミヅ

一 ヒト 敵 レバ 懷 フクト 千 チ 金 カネ

試 シ 使 メバ 夷 イ 齊 シテ 飲 マ

終 シ 當 ニ 不 ル 易 ヘ 心 ヲ

古人此の水を云えらく、

一たび敵れば

千金を懐う、と。

試みに夷齊をして

飲ましめば、

終に當に心を易えざるべし。



参考図書

『古文真宝』(前集)上
新釈漢文大系(明治書院)他

この水をひとたび飲めば千金を願う欲が生ずるといふが、ために伯夷と叔齊に飲ませてみれば、二人の節操がかわるといふことはない。

夷齊 || 伯夷と叔 齊の兄弟。高潔な人物のたとえ。

当時(4世紀)東晋の領土であった広州では賄賂政治がまかりとおっていた。東晋の朝廷はその悪習を改めるよう、吳隱之を知事として送り込んだ。

広州の手前十里の石門というところに「貪泉」という湧水があり、この水を飲むと欲望にとりつかれるという言い伝えがあった。(貪欲になるのは悪名を持つ泉の水のせいではないと) 吳隱之がこの水を飲んで詠んだ詩。広州の知事に着任後も吳隱之の清廉潔白な心と行いはかわらず、名をあげたという。

『晋書』卷九十、良吏列伝に記載がある。(新釈漢文大系「貪泉」の【題意】他参照)



貪 泉、たんせん 吳 隱 之、ごいんし

古 人云 へラク 此 ノ 水 ヲ

一 タ ビ 敵 レ バ 懷 フト 千 金

ヲ

試 ミニ 使 メ バ 夷 齊 ヲシテ 飲

マ

終 ニ、シ 當 ニ 不 ル 易 ヘ

心 ヲ

こぶんしんぼう
『古文真宝』 中国の詩文集。前後二十卷。

前集十卷には漢から宋代までの詩を、後集十卷には戦国時代末から宋代までの文を収録する。編者は宋末～元初の黄堅（こうけん）とされるが未詳。

室町時代に伝来して五山の学僧に愛読され、江戸時代には漢詩文の学習の必読書とされるまでになった。

『^し戸^し子』（周の^し戸^し佼の書）に「孔子盗泉（山東省泗水にあった）を過ぎて、渴けり。而も飲まず。其の名を悪（にく）むなり。」とある。（孔子が）悪徳の名の泉の水を飲まなかったのは、その不義をにくむ心のはげしかったためである。吳隱之の詩は、この孔子の話をして反してよんだものであろうが、しかも伯夷・叔齊の名を借りて暗に自分の心を述べている。

（新釈漢文大系「貪泉」の【余説】より）



吳隱之（？～414年）
東晋の政治家



本会では毎年、横浜市中心図書館に、漢点字書を納入しております。一昨年度までは一〇年を掛けて、

『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）を、漢点字訳して納めました。昨年度は、『古事記』（次田真幸著、講談社学術文庫）の上巻と中巻を納めました。

今年度は『古事記』の下巻と、『新芭蕉俳句大成』（堀切実・田中善・佐藤勝明編、明治書院）の冒頭部分を、漢点字訳して納入する予定です。

ここにその「序」を、ご紹介致します。

序

第二次大戦後の芭蕉研究は大きく変化した。芭蕉の作品の中で最も親しまれてきた発句（俳句）についても、そこに「詩」を読むことと共に、「俳諧」を読み

取ることが加わり、新しい解釈・鑑賞が展開されてきた。例えば「古池や」の句についていえば、これを日常詩として見る白石悌三の説、『袋草子』の故事のパロディと見る深沢眞二の説、切字「や」の後の空白を重視して蛙は実際には池に飛び込んでいなかったと見る長谷川權の説など、様々の説が提示されてきた。

芭蕉発句の注釈は、『校本芭蕉全集』をはじめ、いくつかの古典文学全集類中の芭蕉句集や単独著者による芭蕉注釈書などにおいて、全句評釈が試みられてきたほか、各種の講座・辞典類でも多く取り上げられ、さらに研究者や俳人の著作や論文・評論の中でも、その一句一句について独自の解釈が展開されている。

本書は、そうした戦後約七〇年間に登場してきた諸説の要旨を整理し、可能な限り本文を引用することに務めながら、それぞれの句の解釈の方向性を探ろうとしたものである。

本書に先行するものとして、江戸期以降、一九六〇年頃までを扱った、岩田九郎の『諸注評釈 芭蕉俳句

大成』（明治書院、一九六七）がある。この『大成』の果たした意義はきわめて大きいものであった。本書はこれを発展的に継承し、戦後、新しい芭蕉句研究の出発点となった山本健吉の『芭蕉―その鑑賞と批評』（新潮社、一九五五―五六）以降、現在に至るまでの諸注集成として編纂したものである。

研究者はいうに及ばず、一般読者、俳句愛好者にとっても座右の書としてきわめて便利であり、かつ有益なものになっていると確信する。

二〇一四年秋

編者

（以下、凡例から、本書の構成について）

掲出句（底本）

【考】 成立年次、季語、前書など。季語は「春」「夏」「秋」「冬」の四季で分類した。また、底本以外の前書も適宜ここで紹介した。

【解】 句の解釈と語釈。

【諸注】 各文献を、イ 全句評注釈書類、ロ 講座・辞典類、ハ 研究書・評釈書・学術論文・評論などに分類し、できる限り本文を引用しながら、その要旨を年代順に紹介した。主要文献の詳細は次項および後掲の「引用書目解題」を参照のこと。引用にあたっては、文献の取捨選択はあっても、その扱いは努めて公平になるよう留意し、客観的で丁寧な記述に留意した。

【形】 句形の異同、初案、改案、成案。なお、芭蕉と同時代のものを中心に検討したため、「底本にのみ所収」とした場合も、時代を下って掲載されている可能性もある。

【評】 一句の問題点と今後の展望。執筆者による全体の総括。



編集後記

今号で山内様の「障害のある子どもへの読み聞かせ方法」を目にして、子どもに寄り添い、障害の程度に応じるとはどういうことか、興味を持たせるには、理解しやすくする方法は何かなどを考え、読み方に工夫をこらしているのがよくわかりました。興味を覚えました。

私も拡大写本のボランティアをしています。目に障害のある小・中学生の子どもさんに教科書の拡大写本を手書きやパソコンで作成し提供しています。同じように障害の程度にあわせ、文字、図等を大きくしたり、太い線に変えたり、見やすい色に変えたり、白黒反転したり等、一冊の教科書で拡大では20分冊以上にもなることがあります。

先日近くの図書館に行ったとき、「みる、さわる、きく」のパンフレットを目にしました。読書の季節でもあり、読書方法にもいろいろなかたち「図書バリアフリー」があるのでですね。

宮澤義文

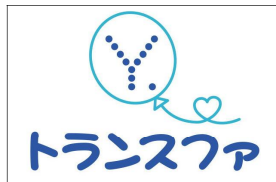
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2024年1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。